

行動特性と養育条件の関連（2）
外向／内向による養育環境からの影響度の差

頼 藤 和 寛

Summary

The Relationship between Behavioral Characteristics and Nurture Background (2) —Differences of Influence by Shared Environment on the Extravert and the Introvert Children—

Kazuhiro Yorifuji

A wealth of research in human behavioral genetics over the years has demonstrated that social extraversion is by half determined genetically and stable enough during developmental ages. Differences of shared environmental (i. e. familial) influence on extravert and introvert children are the focus of the present study.

Until 1992, a psychiatrist or a psychologist interviewed and assessed 156 adolescent participants, 104 boys and 52 girls aged 12 to 15 years, individually at the child guidance centers of Osaka prefecture. Ratings concerning familial background and child's behavioral traits were made using three to five-point scales. The 13 items of behavioral characteristics were factor analyzed, yielding three common factors as follows ; extraversion, social maturity, and imaginativeness. According the factor scores, the subjects were divided to two groups, namely, extravert/introvert, socially mature/immature, or imaginative/non-imaginative.

The univariate ANOVAs and multiple comparisons indicated that, in some aspects, the introvert and imaginative children were more sensitively influenced from familial background. Path analyses showed quantitative and qualitative differences of the influence by nurture variables between the extravert and the introvert subjects. For instance, the extravert seemed to be less influenced from early nurturing conditions than the introvert.

These findings show the variance in conditionability or susceptibility, and suggest the need for consideration of the children's trait in future studies of the nature-nurture problem.

緒 論

これまで人間の性格や行動傾向を偏りなく評価した資料は、それが自記式質問紙による測定であれ専門家による評定であれ、ほとんどの場合そこから、いくつかの共通する基本特性が抽出されてきた。行動科学においてこれらは「超因子」と呼ばれ⁶⁾、たとえばビッグ3として外向性 extraversion, 神経質 neuroticism, 精神病性 psychoticism が知られている。これ以外にもビッグ5 (神経質, 外向性, オープンネス, 協調性, 勤勉性) をあげる研究者²⁾や7因子, あるいはそれ以上を主張する者もいるが、大半の超因子, すなわち基本特性に共通して含まれているのが外向性ないしそれに準ずる因子である。

外向性とは、もともと C. G. ユング⁵⁾によって関心や欲動が外界に向かう傾向を意味していた。これに対して内向性 introversion では主として内面的な方向に精神生活が向けられる。この対概念は、その後 H. J. アイゼンク³⁾によって社会的外向と社会的内向に読み換えられることになり、より実証的に測定できる人格尺度として利用されるようになった。社会的外向とは、実際の行動が向社会的・社会的・活動的な傾向を指し、社会的内向とは、非社会的・寡黙・内気な傾向を指す。

当然、社会的外向性 (以下、単に外向性という) は人格・行動に関するひとつの特性次元 (尺度) であって、それがプラスであれば外向的、マイナスであれば内向的とされる評価軸となる。質問紙法にしても評定尺度にしても、これを多数の被験者について測定するとたいてい正規分布、いわゆるベル・カーヴ (釣鐘様の分布) に近い出現頻度を示す。現に、極端に外向的な人や極端に内向的な人は僅かに見られるのみで、大多数の人々はやや外向的かいくぶん内向的なだけなのである。

この外向性の度合いがいかなる規定要因によるのかは、近々二十年ほどのうちにほぼ定説に近いものが確立されてきた。欧米から豪州にかけて、レーリンとニコルズによる800組⁷⁾、一万組以上のフローデルス・ミルヘッド他⁸⁾、約三千組のマーチンら⁹⁾による双生児研究などを総合すると、外向性の度合いの40-50%までが遺伝によるものと算定されている。ここで注意しなければならないのは、このことが残る50-60%が環境、特に親の育て方で決まるということを意味しない点である。まず測定につきものの誤差成分 (およそ20%) を除外しなければならない。次に、人格発達を決めるのは家庭内環境によるものばかりではない。現に、異環境に育った一卵性ならびに二卵性双生児のデータが集積されてくる¹⁰⁾につれて判明したこととして、非共有環境、つまり同胞間で共有されない (主として家庭外の) 環境要因の作用が予想外に大きく、しかもこの影響は年長児や成人ほど大きくなる傾向が認められる。IQ などでは、遺伝要因さえ年長になるほど強力になってくるという驚くべき証拠があがってきた⁹⁾。かつて逸話的 anecdotal ないし回顧的 retrospective (ad hoc) な報告によって強調されてきたほど養育による影響力は大きくないらしい。経験的にも、しつけや指導によって内向的な子どもを外向的にすることや、逆に外向的な子どもを内向的に変えることは困難である。また、一部に思春期を境によ

り外向的に、あるいはより内向的に変化するケースもあるが、大半は「三つ子の魂、百まで」なのである。

こうした実証的研究の集積を踏まえ、本論では、中学生の段階での外向性の度合いが乳幼児期から大きく変化していないものと前提して、外向的な子どもは養育条件からどの程度の影響を蒙るのか、内向的な子どもが受ける影響とどのように異なるのかについて検討を加えたい。

対象・方法・結果

対象は平成4年度までに大阪府の児童相談所（現・子ども家庭センター）において、精神科医ないし臨床心理士によって個別に面接された、12～15歳（13.2±2.4）の中学生156例である。

男子104例、女子52例で、問題種別としては非行事例・不登校事例・その他を含んでいる。多くはなんらかの適応問題を示しているので一般児童としての代表性は乏しいが、幸い児童相談所という機関の特質上、反社会的ケースだけに偏ることも情緒障害ケースだけに偏ることも少ない。むしろ、家庭背景や人格特徴の評定結果は（貧困家庭から裕福な家庭まで、過保護から放任・虐待まで、極端に無神経な者からきわめて過敏な者までが含まれるので）バラツキ、すなわち分散の大きいものとなる。これによって、個人特徴と養育条件との関連は検出しやすくなるはずである。

評定された家庭背景や養育条件（以下、背景要因と総称するが共有環境 shared environment 要因の主たる成分である）の例と評定の目安は表1に示す。

表1 背景要因の項目と評定

背景要因項目	内 容	階級の目安
同 胞 条 件	同胞数と修正順位から単子（ひとりっ子）と長子、中間子、末子に分類した	1：単子 2：長子（単子以外の第一子） 3：中間子 4：末子
社会経済条件	生計や居住条件から4段階に評定した	1：不良（生保受給相当） 2：平均以下 3：平均域（定職・中流家庭） 4：良（3以上で裕福）
養 育 様 式	過去の養育対応を全体的に評価して、拒否・放任・適度・過保護の4段階とした	1：拒否的（拒絶や虐待傾向） 2：放任的（保護監督不十分） 3：平均的（適度） 4：過保護
母 性 養 育	母親ないしそれに準ずる保護者からの養育関与の度合いを4段階評価した	1：欠如（母性的関与なし） 2：不十分 3：適度 4：過剰
父 性 養 育	父親ないしそれに準ずる保護者からの養育関与の度合い	1：欠如（父性的存在なし） 2：不十分 3：適度以上
両 親 関 係	父母の夫婦関係の緊密度を4段階に評価した	1：欠如（生死別） 2：不良 3：不明（表面的には機能） 4：良好

実際には、これらに加えて性別・年齢・問題種別・問題発生年齢や、同胞数・同胞関係など15項目が記載ないし評価されており、母性養育と父性養育については3歳までと4歳以後に分けて評定している。また本人の適応状態に関しても学業態度・非行進度・家庭内外での適応度などが4件法で評定されている。

次に、行動・心理特性（以下、行動特性と略す）に関しては表2に示す13項目について5件法で評価された。

表2 行動特性13項目の内訳

行動特性	内 容	評定基準
活 動 性	主に身体的な活動レベル	1：ほとんど動かない 3：特徴なし・年齢相応 5：つねに活動的
言 語 性	会話や対話の活動レベル	1：ほとんどしゃべらない 3：特徴なし・年齢相応 5：多弁・黙っておれない
社 交 性	つきあいや交友への傾向	1：孤立・つきあえない 3：特徴なし・年齢相応 5：非常に社交的
対人感覚	相手の立場や感情の把握	1：無関心 3：特徴なし・年齢相応 5：正確で敏感
遵 法 性	ルールや規範への順守性	1：違反多く無反省 3：特徴なし・年齢相応 5：逸脱皆無・マジメすぎる
意 欲	一般的な動機づけレベル	1：まったく無気力 3：特徴なし・年齢相応 5：意欲まんまん
攻 撃 性	敵意や自己主張の強度	1：低い・誘導にも無反応 3：特徴なし・年齢相応 5：攻撃的・挑戦的
情動統制	情動や衝動のコントロール	1：無統制で短絡的 3：特徴なし・年齢相応 5：状況に応じ自己統制
想 像 性	イメージや空想の喚起力	1：欠如・即物的 3：特徴なし・年齢相応 5：空想癖・イメージ豊富
対人緊張	対人場面における緊張度	1：まったくリラックス 3：特徴なし・年齢相応 5：過度に緊張
人格成熟	暦年齢からみた情緒発達度	1：きわめて幼児的・未熟 4：特徴なし・年齢相応 5：年齢以上の言動や判断力
知 能	知的課題解決の達成度	1：遅滞域（IQ70以下相当） 3：平均下限（同90-100） 5：優秀（同120以上に相当）
神経症度	不安強度やその対処不全	1：動じない・情緒安定高度 3：やや緊張・小心 5：症状あり・日常に支障

これらの評定に関して系統的に評者間信頼性 inter-rater reliability は確認していないが、たまたま同一事例を面接した担当者の間ではほとんどの項目で評点が一致し、一部で異なる場合もプラスマイナス1評価点を超えることはなかった。おそらく同じ機関のスタッフであれば（いわゆる「客種」を共有しているために）評者間の一致度は十分高いものと思われる。

得られた行動特性評価点のデータは因子分析され（共通性の推定は SMC とし、主因子解で固有値1以上の3因子をバリマクス基準で直交回転して単純構造を得た）、表3のような行動特性因子が抽出された。

表3 行動特性13項目評価点の因子分析

主因子解で固有値1以上の3因子を直交回転し、単純構造を得た。数値は因子負荷であり、太字はその因子に特徴的なものを示す。

因子 特性項目	I	II	III	共通性
活動性	.65	-.13	.27	.51
言語性	.68	.02	.36	.59
社交性	.78	.17	.08	.64
対人感覚	.12	.55	.09	.32
遵法性	-.57	.32	.24	.48
意欲	.50	.21	.39	.45
攻撃性	.45	-.31	.37	.44
情動統制	-.38	.63	-.05	.54
想像性	-.02	.08	.58	.34
対人緊張	-.69	.08	.07	.49
人格成熟	.02	.68	.17	.49
知能	.07	.31	.47	.32
神経症度	-.60	-.07	.36	.50
因子寄与 命名	3.25 外向性	1.56 成熟性	1.29 内面性	
解釈	社会的・多弁・活動的 で対人緊張の少ない向 社会的な行動傾向	暦年齢に比して社会的 成熟度が高く自己統制 が良好な対人傾向	イメージや精神活動が 豊かな内面性を有する 心的傾向	

外向性、成熟性、内面性と名付けられた行動特性3因子の解釈は表3にあるとおりである。少し補足すると、外向性 extraversion はアイゼンク³⁾、ウィディガー¹³⁾、コスタとマクレ²⁾らの研究で抽出されている社会的外向性と内容面でほとんどかわらない。因子分析によって得られる因子は測定項目のいかに依存するものだが、偏らず総合的に行動特性を拾って評定した場合にはどうしても再現されてしまうという点で、外向性という尺度はかなり頑健なものと考えられる。

これに対して、成熟性 social maturity と内面性 imaginativeness は本研究で採用された13項目に依存している可能性が大きい。児童福祉機関が扱う事例については、暦年齢に不釣り合いな社会的未熟や情動統制不全、あるいは想像力の過剰ないし欠如が不適応の基盤に予想され

るので、「人格成熟」や「想像性」などを項目に加えた。おそらくこのことによって、成熟性や内面性といった因子が析出してきたものと思われる。

成熟性とは、主として自己統制の度合いを指すが、もちろんこれは暦年齢に比していかほど対人感覚や情動統制が発達しているかの指標である。この尺度がマイナスで絶対値が大きいくほど、いわゆる「人格的に未熟」ということになる。内面性とは、主として想像性、すなわちイメージや精神内界の豊かさを反映しており、知能とも関連しているような内的精神活動の指標である。これが低いと、関心や発想が具体的・即物的なだけのレベルにとどまる。

成熟性や内面性にしても、ある程度の遺伝規定性を帯びるだろうが、同じほど環境の影響によっても左右されるはずである。環境からの影響のうち、共有環境（家庭・養育条件）については評定が容易なので、いかなる要因が成熟性や内面性を増減させるかを検討することが可能である。その度合いが子ども自身の外向性／内向性によって、いかほど異なるかが本研究の目的となる。

そこで標本の156例を、外向性についての因子得点が正か負かによって二群に分けた。すなわち外向性の因子得点が0以上のものを外向群（ $n=76$ ）、0未満のものを内向群（ $n=80$ ）とした。参照のために性別、成熟性、内面性についても、男子／女子、成熟群／未熟群、内面群／即物群に二分してみた。それぞれについて、背景要因と面接時の外向性・成熟性・内面性との関連を一要因分散分析で検討したところ興味深い結果を得た。有意水準に達したものは多重比較を行って、階級による因子得点の増減方向も確認してある（／は後の階級ほど高値になる。＼は逆に後ほど低値。△は両端の階級が低値になる）。これらの結果を表4に示す。

性差については、社会経済条件（SES：家庭の経済階層）が内面性に対して促進的であること、父性養育関与が成熟性に対して促進的であることは男女両性ともに認められたが、それ以外については背景要因の影響に若干の性差が認められる。すなわち男子のほうが背景要因によって外向性が左右される傾向がやや大きいように見える。ただし決定的な相違とは言えない。

成熟性に関しては、成熟群／未熟群で背景要因からの影響の受け方に差はあるものの、どちらがより影響を受けやすいかについては大差がない。内面性に関しては内面群のほうが即物群より背景要因によって影響を受けやすいようである。ただ、成熟性と内面性については、発達期を通じて安定した特性であるか否かが外向性ほど確認されておらず、また遺伝規定性に関しても信頼しうる研究がない（内面性の成分のひとつである知能に関しては発達期を通じてかなり安定している）。

一方、外向性に関して、外向群に比して内向群が成熟性や内面性について背景要因（特に養育様式・母性関与・父性関与）と強い関連を示していることは注目に値する。外向性という特性が発達期を通じてかなり安定しているとするならば、幼児期より内向的な子どものほうが外向的な子どもより成熟性や内面性の度合いと背景要因との関連が大きいことになる。

これらの結果をまとめると、一般に内向的で内面的な子どもは背景要因（主として共有環境）からの影響を受けやすいのではないかという原則が示唆されたことになる。

そこで、従来から子どもの人格発達に決定的な影響を与えるとされてきた背景要因である社

表4 ANOVAによる有意差検定で階級間に差を認めた項目対一覧

凡例 *：層別条件につき除外

有意差項目では 数値：f0値 /：階級に応じ増大 \：同じく減少 △：中位ほど増大

層別＝		性別		外向性		成熟性		内面性	
背景要因	行動特性	男	女	高 n=76	低 n=80	高 n=72	低 n=84	高 n=79	低 n=77
同胞条件	外向性 成熟性 内面性			*	*	*	*	*	*
経済階層	外向性 成熟性 内面性	/2.9	/3.0	/2.9	/2.7	/3.1	*	*	*
養育様式	外向性 成熟性 内面性	\4.1		*	*	*	*	\7.5	△3.1
					/3.0		/2.9	*	*
母性関与	外向性 成熟性 内面性	\2.9	△4.3	*	*	*	*	\9.0	
					/3.7			*	*
父性関与	外向性 成熟性 内面性	△4.2	/7.6 /5.5	/4.9	/10.7	*	*	\5.2	/7.6 /5.2
								*	*
両親関係	外向性 成熟性 内面性			*	*	*	*	*	*
有意差のあった項目対＝		5 ? 3		2 <	5	1 ? 2		4 >	2

会経済条件・同胞数・父母の養育関与・両親関係などが子どもの成熟性や内面性にかかほどの影響を及ぼすのかを、外向群と内向群について分析してみることにする。

このような因果関係の定量的な検討に威力を発揮する統計手法としてパス解析がある。パス解析が理想的になされるためには、因果連鎖の方向が確実な要因を左から順に並べたパス図式(再帰モデルという)が描かれねばならない。ところが背景要因の多くは、しばしば線形因果関連より円環因果関連を示すものである。これでは推奨されているパス図式の条件を満たしにくい。しかも独立変数である背景要因のほとんどが相互に強く相関しており、重回帰分析を多用するパス解析に馴染まない(多重共線性とか分散の抑圧といった計算上の問題が生じやすい)。

そこで、極度に簡素化した近似的な因果モデルとしてパス図式を「社会経済条件→養育条件→成熟性/内面性」の順に並べ、背景要因のうち経済階層と養育条件がどの程度まで外向的ないし内向的な子どもの行動特性因子に影響を及ぼすかを大雑把に推定してみる。「大雑把に」とは、影響力の大小関係は確認されるにせよ定量的な精度までは厳密に期待できないというほどの意味である。ここでは養育条件として、同胞数・養育保護度(養育様式の尺度を不良/適度/過剰の順位尺度3段階に変換)・3歳までの/4歳以後の母性養育関与・同じく父性養育関与・両親関係(欠・不良/不明/良好に順位尺度化)という7変数を因子分析して得た2因子を取り上げた。

第一因子である「持続安定因子」は、主として幼児期以後の母性養育関与と父性養育関与が

表5 家庭養育条件の2因子
年齢12-15歳/男子104例, 女子52例

因子 家庭養育条件	I	II	共通性
同胞数	-.00	.34	.12
養育保護度	.36	-.68	.59
- 3歳 母性関与	.42	-.70	.67
4歳- "	.69	-.22	.52
- 3歳 父性関与	.49	-.72	.75
4歳- "	.77	-.14	.61
両親関係	.64	-.23	.45
因子寄与 命名	2.01 接続安定因子	1.70 早期不全因子	
解 釈	幼児期以後は十分な母性・父性関与がなされ、夫婦仲も良好な条件	乳幼児期に保護や養育関与が不十分であった条件	

篤いこと、両親の夫婦仲が良好なことを反映した要因である。主として4歳以後の家庭環境や親子関係が持続的に安定している条件を指している。第二因子の「早期不全因子」は、全般に養育保護の不全と、特に3歳までの母性・父性養育関与度の希薄さを反映した要因である。この2因子は直交回転によって抽出されているから独立した要因で互いに無相関である（もちろん因果関連もない）。したがって、156例の養育背景には、乳幼児期に保護不全で幼児期以後に安定したもの、最初は保護されていて後に家庭が不安定になったもの、乳児期から現在まで一貫して養育背景上のハンディを背負ったもの、一貫して保護や家庭の安定が保証されてきたものまでがほぼ等分に混在していることになる。

パス図式としては、左側から社会経済条件、次に養育条件2因子、そしてそれら3要因から影響を受ける子どもの成熟性ないし内面性という因果方向を想定している。これを外向群と内向群のそれぞれについて適用し、パス係数を求めた。パス係数としては標準偏回帰係数を充て、この大小が因果関係の強さ（影響力）を反映している。また慣例に従ってパス係数の絶対値が0.05未満の因果関連の矢印は省略した。

パス図式において付記されているEの値は残差パス係数であり、この自乗値が左側の独立変数以外からの全影響量を示す。成熟性に関しては明らかに内向群のほうがEが小さい。そのぶん社会経済条件や家庭養育条件からの影響をより強く受けていることを意味している（外向群が4%に対し、内向群が15%程度）。内面性については、両群間にこうした差がない（両群ともほぼ14%）。ただ、この場合は影響を与えている養育背景の内訳に大きな違いがある。

内向児の成熟性は社会経済条件のみならず早期不全条件と持続安定条件からもプラスの影響を受けるのに対し、外向児の成熟性は社会経済条件からしかプラスの影響を受けない。これらの影響の総和が大きいことから内向児の成熟性は養育条件からより強い影響を受けていることになる。パス係数の符号からみて、内向児は早期幼児期までには保護や関与が乏しく、それ以後に安定した家庭で十分な養育関与が保証されることで成熟性が促進されると解釈される

社会経済階層と家庭背景からの影響差

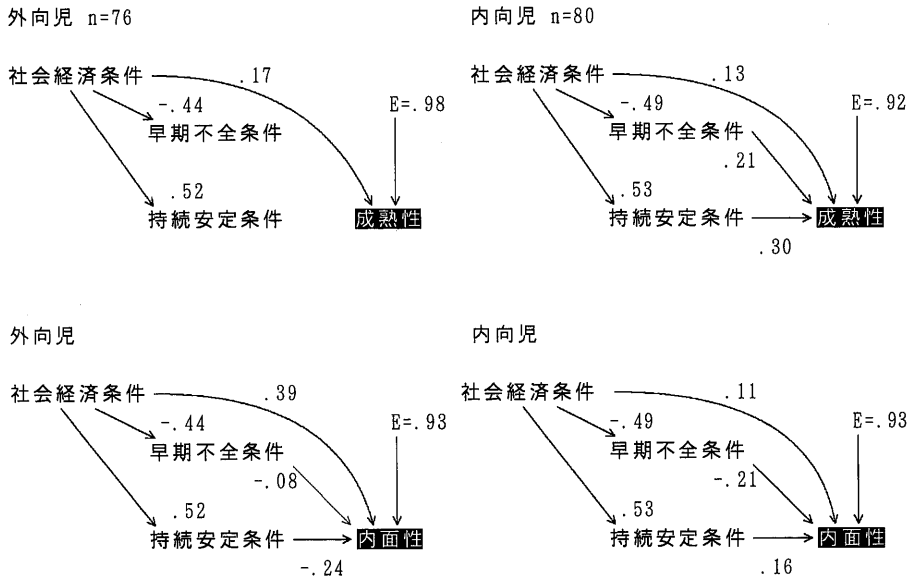


図1

が、外向児ではこうした原則が成立しない。

これに対して外向児の内面性は社会経済条件から最大の促進を受けるのに対し、内向児の内面性は早期不全条件によって最大の抑制を受ける。興味深いのは持続安定条件が、外向児の内面性に対しては抑制的に、内向児には促進的に作用していることである。表現を変えると、外向児においては経済階層が高く幼児期以後に家庭円満度や両親からの関与が低いほど内面性は促進され、内向児では乳幼児期に保護・関与が篤く、その後も安定した家庭養育がなされるほど内面性が増大する、と解釈し得る。

これらの結果を総合すると、成熟性に関しては外向・内向の間で養育背景からの影響度に量的な差があり、内面性に関しては質的な差がある、と言える。ただ、残差パス係数からも明らかかなように、経済階層や家庭養育条件の主だった要因にしても、子どもの成熟性や内面性の数%から十数%程度を左右するにすぎないことにも留意したい。

考 察

外向性の大小によって層別した外向群/内向群についてなされた分散分析の結果とパス解析の結果は、両群で背景要因（特に経済条件と両親の養育関与）が子どもの成熟性や内面性とのようにいかほど関連するかを示している。そして、養育背景が子どもに及ぼす影響が、子ども本人の特性や資質によって（質的にも量的にも）かなり異なるものであることが示唆された。

従来、養育環境が子どもに及ぼす影響に関する実証的研究ですらそのほとんどが、被験者である子どもを十把ひとからげにして扱ってきた。しかし、影響を受ける側である主体に生理・

心理的な個体差が無視できないからには、当然ながら環境刺激からの被影響度も受け手の条件によって異なるはずである。このように個体条件を層別して課題への反応差を検出する研究の成功例としては、たとえば外向・内向における作業能率の差¹⁾ (Colquhoun, W. P. et al., 1964) や自己モニタリングの高低による社会的反応の差¹⁰⁾ (Snyder, M. et al. 1974-1985) などが代表的なものである。これらは、被験者を十把ひとからげにしているには到底検出できなかったであろう行動科学上の法則を発見してきた。この発想を「素質か養育か nature or nurture」の研究に導入しないのは不用意のそしりをまぬかれまい。

さらに、子どものあらゆる特性が同じように養育条件から影響を蒙るのではない。たとえば攻撃性と言語発達とでは影響の受け方も受ける度合いも異なるはずである。また同程度に遺伝規定性のある特性であっても、共有環境(家庭背景など)のどの側面から主として影響を受けてどのようにどの程度修飾されるのかが検討されねばならない。

最後に、養育環境や親子関係からの影響については必ずしも一方向のものとは限らないことにも留意する必要がある。すなわち、子どもの資質や気質が養育条件に影響を与える可能性も考慮に入れなければならない。特に親子関係や同胞関係については、対人的影響の双方向性を無視できない¹¹⁾。本研究のような調査法や分析手法において、こうした相互作用を検出することは本来不可能なのではあるが、さいわい経済階層や家庭養育条件2因子に関しては子どもの特徴がそれらを大きく変動させる可能性が少ないものと期待される。ただし、親の社会経済条件や養育行動には親自身の資質も反映されており、養育環境による影響のみならず生理的近縁度による効果も無視できない(これまでの実子/養子比較研究を総合すると養育背景からの影響の半ばに遺伝による効果が混入していると推定されている⁹⁾)。

さて、層別の上、分散分析を行った表4の結果からすると、子ども本人の外向性(の因子得点)が低く内面性が高いほど背景要因からの影響を受けやすいように見える。これは、もちろん内向的で内面的な子どもほど養育者からの働きかけが濃厚になるといった側面も無視できないが、素直に解釈すれば内向的で内面的な子どもほど生育環境からの被影響度が大きいことになる。このことから容易に想像されるのは、学習効率ないし条件づけられ易さ conditionability が内向的で内面的な子どもにおいてより大きいのではないかという可能性である。内向性にともなう過敏さと内面性にともなう高知能とは、ともに環境からの作用に影響されやすい基盤と考えられる。このことは、かつて幼時体験や生育史が人格形成をほぼ決するかと言われた臨床領域において、その顧客や被験者の大半が内向的で内面的なクライアントであったこととも符合する。

しかし、外向的で即物的な子どもであっても、内向児とはまた違ったかたちで養育背景からの影響を蒙っているはずである。外向/内向に層別されたパス解析の結果である図1からすれば、成熟性に関して外向児は家庭養育条件からほとんど影響を受けていないが、内面性に関しては社会経済条件と持続安定条件から内向児より大きい影響を蒙っていることになる。

内向児では、乳幼児期に保護が不十分でその後家庭が安定するような生育史のほうが成熟性が伸びるといった傾向が示されている。このいくぶん不可解な消息を理解するには古典的な精

神力動論を援用することもできるであろう。すなわち、内向児にあっては早期不全条件のもとで基本的不安 (Horney, K., Erikson, E. H. etc) のようなものが準備され、後年それへの防衛として自己統制や対人感覚が研ぎ澄まされるのかもしれない、と解釈するのである。もちろん、こうした建設的な人格発達のためにはその後の持続安定条件が必要となるのだろう (一貫して家庭養育条件が不良なら、基本的不安に対する防衛は病的なものになりやすいかもしれない)。経験的には、幼児期に破綻家庭から優良な里親に委託された里子の多くは、実親からの素質的な悪条件が伝えられていないかぎり、概して成熟性の高い「しっかりした子」に育つような印象がある。もちろん彼らが内向児でなければこの理屈は成立しないのだが、これについては印象論の域を出ないので確認のしようがない。

さて次に内面性に関しては、持続安定条件が良好なほど内向児では高くなるのに対し、外向児では低くなる。すなわち外向児においては、経済的には裕福だが家庭内や親子関係が安定していないような養育条件のもとで内面性が増強される。これに対して内向児では、社会経済条件の作用よりも乳児期から一貫して保護的で安定した家庭背景のもとで内面性が育っていくことになる。この違いについて、おそらく外向児の場合は生活にゆとりがあり、しかも家庭に保護不十分および夫婦不和などの問題があることによって始めて「ものを考える」契機が多くなるためかと思われるのに対し、内向児ではそうした家庭内悪条件において内面性を育てる余裕がなくなるのであろう。少なくとも内向児に関しては相当配慮のいきとどいた養育保護／関与のもとで育てないと内面性が伸びにくいようである。

結 語

従来、漠然と子どもや成人の性格ないし行動傾向が幼児期の家庭背景や養育条件のような共有環境によって強く規定されているかに信じられてきたが、性格や行動のいかなる側面がどの程度に養育環境と関連しているかについての客観的な検証が十分なされてきたとは言いがたい。

本研究では、外向性という安定した特性について中学生の段階で評定し、それが乳児期より一貫しているという前提のもとに、より外向的な子どもより内向的な子どもの行動特性が家庭養育背景 (共有環境条件) とどのように関連するのかを検討した。

代表的な養育背景によって左右される子どもの行動特性の幅 (測定された分散のいかほどを説明するか) はせいぜい20%以内ではあったが、因子得点を基準に外向群／内向群、内面群／即物群に二分した分散分析の結果によると、内向的で内面性の高い子どもの特性ほど養育環境から比較的強い影響を受けると推定される。また、外向群と内向群のそれぞれについて、成熟性や内面性がどのような背景要因からどの程度に影響されるかをパス解析によって比較した結果、内向児の成熟性が家庭養育条件によって左右される度合いが大きく、また内面性に関しては外向児が家庭の経済階層といった外的な条件によって、内向児は親子関係のような対人的環境によって影響を受けやすいことが判明した。全般的にみて外向児では成熟性や内面性に関して、早期の養育条件との関連が乏しいように思われる。

これらの結果から得られる「子ども本人の特性傾向によって養育や家族関係からの被影響度が異なる」という観点は、あらゆる「素質—養育問題」を考える際に閑却されてはならないだろう。

文 献

- 1) Colquhoun, W. P. & Corcoran, D. W. J. : The effect of time of day and social isolation on the relationship between temperament and performance. *Brit J Soc Clin Psychol*, 3 : 226-231, 1964
- 2) Costa, P. T. Jr. & McCrae, R. R. : The NEO Personality Inventory Manual. Psychological Assessment Resource, Odessa, 1985
- 3) Eysenck, H. J. : The biological basis of personality. C. C. Thomas, Springfield, 1967 「人格の構造」梅津他訳, 岩崎学術出版社, 東京, 1973
- 4) Floderus-Myrhed, B., Pedersen, N. L., & Rasmuson, I. : Assessment of heritability for personality based on a short form of the Eysenck Personality Inventory : A study of 12, 898 twin pairs. *Behavior Genetics* 10 : 153-162, 1980
- 5) Jung, C. G. : *Psychologische Typen*. Rascher Verlag, Zurich, 1921 「タイプ論」林訳, みすず書房, 東京, 1987
- 6) 柏木繁男 : 「性格の評価と表現」有斐閣ブックス, 東京, 1997
- 7) Loehlin, J. C. & Nichols, R. C. : *Heredity, environment, and personality*. University of Texas Press, Austin, 1976
- 8) Martin N. G. & Jardine, R. : Eysenck's contributions to behavior genetics. in "Consensus and controversy (Modgil, S., Modgil, C. eds.)". Falmer, Philadelphia, 1986
- 9) Plomin, R. : *Nature and nurture : An introduction to human behavioral genetics*. Brooks/Cole, NY, 1990 「遺伝と環境」安藤・大木訳, 培風館, 東京, 1994
- 10) Snyder, M. & Ickes, W. : Personality and social behavior. In "Handbook of social psychology, 3rd ed. (Lindzey, G. & Aronson, E. eds.)", Random House, NY, 1985
- 11) Tellegen, A., Lykken, D. T., Bouchard, T. J. et al. : Personality similarity in twins reared apart and together. *J Person Soc Psychol*, 54 : 1031-1039, 1988
- 12) Thomas, A. & Chess, S. : *The dynamics of psychological development*, Brunner/Mazel, NY, 1980 「子供の気質と心理的発達」林監訳, 星和書店, 東京, 1981
- 13) Widiger, T. A. Trull, T. J. et al. : A multidimensional scaling of the DSM-III personality disorders. *Arch Gen Psychiat*, 44 : 557-563, 1987

Key Words :

extraversion, nature-nurture problem, shared environment, path analysis

(原稿受理1997年12月15日)